上方版浮世草子『好色つや男』（巻二）
― 翻刻と解題 ―

藤原英城

はじめに

本稿は元禄期に刊行されたと推測される上方（京都）版の浮世草子『好色つや男』（巻二）の翻刻と解題である。

〔書誌〕

好色つや男　刊本　半紙本　巻二、一冊

京都大学大学院文学研究科図書館蔵

表　紙　茶色無地原表紙。縦二二・〇糎横一五・七糎。

本　文　四周単辺。縦一九・一糎横一四・一糎。半丁一〇行二〇字前後。

構　成　全一三丁（目録一丁「一」、本文一二丁「二～十三」）。

挿　絵　半丁三面（四オ・七オ・十一オ）。

題　簽　原題簽左肩「（破損）おとこ」。

目録題　「好色つや男巻之二」。

内　題　「好色つや男巻之二」。

尾　題　「好色つやおとこ巻之二終」。

板　心　「好色巻ノ二　（丁数）」。

句　読　「○」（稀に「●」）。

作　者　未詳。

画　者　蒔絵師源三郎風。

刊　記　未詳。

諸　本　京都大学大学院文学研究科図書館蔵本（国文学／Pe／78）のみ。

備　考　野間光辰氏『初期浮世草子年表』（青裳堂書店、昭59）には本書を元禄年間の刊行と推測し、次のように記される。

好色つや男　半紙本／五冊カ

巻二の零本一見。題簽上部破損。「おとこ」の三字を存す。内題入木か。柱刻「好色巻ノ二」。改題本の疑いあり。上方板。

野間氏が一見された本の特徴から、それが本稿の底本とした京大本であることは明らかであろう。

野間氏は本書に改題本の疑いを指摘されるが、内題等に入木の明証は窺えない。また上方板とされることについては、

挿絵の画風も含め、その書誌的特徴から京都版としてよさそうである。

〔梗概〕

本書は『浮世草子大事典』（笠間書院、平29）には未収録のため、以下に簡単な梗概を記す。

巻二

（一）新橋二丁目の大津屋の何左衛門は好色な妻のために若死にし、後家となった妻は商売も止めて借家を始め、七歳になる息子七三郎を守り育てて二、三年は殊勝に暮らすが、京より下ってきた借家人久米助のつや男ぶりに心を奪われる。後家は何かと好色を仕掛けるが、久米助は焦らす。亡夫の忌日を口実に息子と下女を寺参りへ行かせた後家は、ようやく思いを遂げ、情交中に家財産を久米助に譲る手形を渡す。

（二）さる屋敷の奥女中、おきち・おふじ・おさくの三人は気詰まりな奉公勤めの気晴らしに一日の暇をもらい、揃って浅草観音に参詣する。その折、たまたま参拝中の久米助を見初めた三人は腹痛を偽り、久米助に薬を請う。久米助は三人を茶屋の奥座敷へと誘い、好色を仕向ける。三人は闘取りで順番を競い、久米助との情交に耽る。

（三）本丁二丁目の銅屋の新六と遊芸仲間となった久米助は、いつものように新六宅で碁・双六に興じていたが、ある夜、好色ばなしになり、久米助は新六の内儀の腰元に望みのあることを告白する。新六の許しを得た久米助は早速その夜に閨に忍び込み、情交を遂げる。しかし、その女は図らずも新六の内儀であったことが判明し、久米助は逃げ去る。

〔翻刻〕

一、翻刻にあたっては、原則として現行通用の字体に改めた。ただし、当時慣用と思われる漢字表記などについては、そのまま残したものもある。

一、特殊な合字・連字は通行の仮名に改めた。

一、句読点は「○」に統一した。

一、丁移りは、丁付けと表・裏（オ・ウ）を括弧に入れて示した。

好色つや男巻之二

男の手柄に済借屋賃

常嗜薬の付加減

ながゝの借金相済申
その外そもしさまに身をまかせし
何なりとも望次第仍如件

ほうかぶりの綿帽子
ふしぎの女薬の味まて
よきつや男たまる物ては御座らぬぞ

（一オ）

取違たる蚊屋の内　おもひもよらぬ仕合女かたるに落る　男にとがありやるまいぞ〳〵（一ウ）

好色つや男巻之二

男の手柄に済借屋賃

新橋二丁目に大津屋の何左衛門といふ人は。しんだい富貴にさかへひさしき商人なりけるが殊外りはつにてそのあたりのほまれをとりてかくれなき人なり。定なき人界のならひにて内義の好色にせがまれ。ひよつと煩付次第〳〵におもり無常の風にあふがれて。ついあだし野、露ちりとなりぬむかし語りになるもはかなきよの中。若とても頼なし（二オ）御内義のかうがいわげもにしになげ。たもとの珠数の油断なく一心ふらんに後家たて、表をしやく屋にして。商事もやめ世間の人つきあいもせず七三郎といふ七歳になる子をもりそだて。下女壱人つかいうら座敷へ隠居して外へも出ず遠ざかりてねこより外の音づれもなく。淋しきまゝに妻の後生一へんに経念仏けだいなくずいぶんたて、いられける。二三年も殊勝に見へけれどもさすが凡夫のならひにて。久米の親仁さへ女のはぎの（二ウ）しろきを見て通をうしなふならひ聞伝たり。その時久米助は京よりはる〳〵下りてよき借屋もあらばと思ふ。幸後家の表借屋をかり一日〳〵と暮しける後家は此つや男を見そめて。よりそろ〳〵後家も退屈の心ありてはや身だしなみして。次第に仏も遠ざかり経念仏もおこたり。珠数も手につかず朝夕のつとめもむつかしく抹香の匂ひもいやらしく久米助がつや〳〵する男ぶりながめいりて今宵は月待日待のと。かこつけて久米助をよびよせ都（三オ）の名所旧跡よも山のはなしのあい〳〵に。つや男を穴のあくほどながめてさま〳〵の池走ぶりつや男心に思ふやう死だ鳥をさすごとくにおもひ。しかきよかかぶせうかとむねのおとる事たび〳〵にてしつはりとかんにんして。たゝはおくまいにと心をなだめあからさまにいはず茶わんの取替しにしかけしりめにつけてなづませける後家はぬれのみちに心よはく小うた上るりに日をくらしけるかくべついたづらになりて。髪に匂ひあぶらとろ〳〵と（三ウ）

第一図

挿絵第一図（四オ）

ながしつや粉白さゞやかに身のとりなりもあぢにたちまはり。たゞかりそめの口くせにも　恋せずば人は心のなからましものゝあはれは是よりぞしる。といふうたをつや男の来るたび〳〵にぎんじてぬれかゝれども久米助は。さあらぬていにもてなして貞のいろにもいです心の内はいき〳〵とするを。しづめて後家のしかけをまつほどにあるとき下女をよびよせて。けふは幸なき人の忌日也あの七三郎をつれて。はか参り（四ウ）してゆるりと寺々へ参り日のくるゝまでなぐさみ帰るべしと。いはれける下女はやがて子をともなひてまいる門送りとくと

して留主の間に。つやおとこをよびよせ後家の申さるゝは此家は男やもめにてかし申事町の法度にて御年寄殿よりかたき申付にてきさまもやもめにて借屋はなりますまい。久米助はよき折ふしと思ひしからばおまへ様にちとごむしん申事の御座りまするとと後家のよは腰に。いだきつきぢつとしむると（五オ）後家はひごろの恋のつぼそこを打ひろげ身もだへしてあはてけるを。つや男はせかぬふりして大にいきりたる作蔵を後家のまへにいきぬけるほどさしこめば。ねぶとのうみををし出すやうに身ぶるいして男をあしにまとい付。あたりも人もはゞからず一しきり〳〵なき大に水をなかしさりとてはうきよのたのしみといふは是なり。このうへは家もかねもこなたしだいけふかふ夫婦とたのみまするといゝてつや男を腹の上にのせながら。手形をかき（五ウ）てやられける

常たしなむ薬の付加減

折ふしのうつり替事は水のながるゝよりもはやき月日にて。永年切たる奉公人もつとめおゝせて出る時は一時の夢のごとしはんきの奉公人も出替りをまちてざゝめき。男も女もさらりともやうかはりあたらしき奉公のぞむも。あり。又小宿をとりて奉公に有付までは芝居ぐるいして其帰るさは当座ばらいのかりまくら。ならぶるもあり又日比念比の男に和合する（六オ）もあり。手かけまおとこやりくりの最中といふは此時也。実の男をもちながらちよこ〳〵小宿に行ゆめの間に鼻息代弐匁づゝとりて。日野のきるものもつねぐ〳〵の鼻息のかねのたまりにてこしらへ。自然腹に子のとまりたる時はりちぎなる男にすりつけて大分かねをとりて。さいふはからりちんになし又奉公をつとむるぞかし。それより又よき奉公をつとむる女中はつなぎたる犬のごとく外へ出る事ならねば。男影はどのやうな物（六ウ）

第二図

挿絵第二図（七オ）

やらしらずつねにい勢ものがたり清少納言などを。枕箱にしこみ是もふるめかしきとて十二つがいの仕組の絵をながめいりて心をうるわふて。しるをながしける爰にさる屋敷がたの女中三人よりてぬれのはなしの最中也。おきちどの申さるゝはわしは五年以前に男一度はだふれてその、ちは男のはだふれませぬ。おふぢおさくどの申さるゝはわしどもは終に男のこしはふといやらほそいやらゆめにもしりませぬといはれける。さりとては気つまりな奉公をつとめんより（七ウ）死だがましでござんす。其時おふぢすゝみいでおくさまは観音様をしんかうなさるゝほどに。三人のもの一日おひまをこいくわんおん参詣申べしと談合して。おひめさまにだん〳〵申あぐればやがて一日の隙を下されて三人ながら花やかに出たち町人の風俗に見せかけて。浅草にまふで観音の仏前に心をすましくわんねんしてしばしあるほどに。折ふし久米助も参詣してあみがさぬぎて礼をしてきざはし下る時に三人の女中。久米助を一め見て心のうちはやほれ（八オ）けさして久米助を

よびかけそこつなる事にて御座りますれど。俄に腹のいたむ人がござんしてきのどくに思へども薬をもたねばぜひもなし御人躰を見かけて御薬を申うけまするといはれける。其時つや男はこれこそのぞむところなれ幸とよき薬をもちましたあの茶屋まで御出なされませ。つや男は茶屋へはしり行ていしゆに内証合点させておくざしきの一かまへある所へ。女中がたをいれてさて盃いだしよきほどにさけすゝめて（八ウ）てうしをとりて障子さら〳〵とたてまはせば女のしまへわたりたるこゝちに思ひける。とかくこのうへは鬮どりしてとりかちたる女中様を一ばんにはじめませうといへば其中に。お吉とのはしあせにて一にあたりましたすなはち持合の女悦丸を物して。大にをやかしぬる〳〵とはいるをしがみ付鼻息あらくすほ〳〵と。声をあげてこのもしきやうすおふぢおさくは臭をあかめ手をにぎり。歯をくいしばりしるをながしてなふ〳〵。おきちどのあまり声か高（九オ）ぞやもはやゑいかげんにてはなさしやれ。そのやうにひとりの男ではあるまいにぢぎも作法もしらしやれぬかと。口をそろへてしからるゝ。其時久米助は一やすみ心をおちつけて。扨此次はおふじどのと待かねもだ〳〵する所を薬とくとつけてのつしりと玉門にもたしかけちく〳〵と。はいるをすい付やうにしめて。気も魂も消〴〵となりしく〳〵と泣声は。おきちよりまさりてさうがましその時。おさくははらをたてなふ〳〵きやうこつなそのやうに心よいとて（九ウ）あたりに人もなげにしやうしやとにくそうにしからるゝ。久米助も腹ごろして身のあせぬぐいさておさくにかゝりて最前よりさぞ待遠に思召もどうりなりと。いゝもはてぬうちにおさくはもだゆるを取て引しめひたものすほ〳〵とつく。息づかいせつろしく大水を出ししく〳〵なき身ぶるいして弐時ばかり。すこ〳〵する声のそこよりもはや仕舞口に二つも三つも。そへに数をして下さんせいと。いはれける其時残二人の女中手打て大わらひ（十オ）してさらば〳〵の入相のかね

取違たる蚊屋の内

世をわたるならひかしこくみゆる商上手のうそにかためたる人の身躰なり。爰に本丁二丁目に銅屋の新六と云人は身躰夥しき人なり。常にゑいぐわのはなをさかせ昼は能囃碁双六を楽。よるはいろある女に足さすらせてたはふれ御内義はそのあたりに聞へたる美人。腰もとにこしもとつかいて琴三味線の慰事いふにいはれぬ面白事也。けふは御内義さまの堺町（十ウ）

第三図

挿絵第三図（十一オ）

見物とてのりもの三まいがたに腰もと下女ざゞめきて。出るかと思へば娘子の御さと帰りとて乗物かいてはいる門にものもふの声絶ず。台所捌四十あまりの女のめのさやをはづして下女をきり〳〵廻す利発もの見ゆる。其時久米助は新六気にいりて碁のあいてにひたもの参りていつも夜半まで。碁双六打て四方山のはなし其あいはよしはらぐるい京のしまばら大坂新町ばなし口話してほむらをもやす柴屋まち扨又

道中の出女房。問屋はすはのつらの（十一ウ）あついしかたよき客にはずいぶんまわりとれぬ客には。何事もをとがいでおしへて臭をふり面白事もなし。世の中にうまいものといふはま男又後家のねはださては人のむすめ。人めをしのぶこしもと立ながらのやりくりはやわざするも面白ものなりその外のことは存じませぬ先おもひ入を御咄申とかたれば。新六も狂にいりさて〳〵こなたは業平にまさりたる恋しりといふて。ほめられける永物がたりに夜もいたくふけて台所（十二オ）しづまる。其時久米助申けるはそれがしのぞみごとの候へども申かねて今までつゝみ申といふ其時。新六それはいかやうの事ぞずいぶん何事もつゝまずはなし給へそのとき久米助申けるは御内義様のこしもとに心かゝりのぞみなれどももしや貴さまのてのかゝりたる事あらばととはぬもつらしとふもうるさし。むさしあぶな〳〵申ける。其時新六いかにもすいりやうの通去年までは女房ども留主のまの喰ものにせしめけれども。女房共に見付られもはや（十二ウ）ふつ〳〵とらちをあけそれほどのぞみならば此おくにねているほどに。ひそかにゆき給へ。久米助は下のことばこそうれしけれ何かはしらずおくゑ〳〵としのび入蚊屋の内をみれば。前後もしらず寝入たり久米助がむつちりとしたる寝肌にてしつくりとしむる。互和合して女のしりを中にうけてたゝみにつけず男も女もはらのつぶるゝほどおして。七八ばん女に気やらして久米助は又勝手に出て。今宵は貴さまの御影おなさけにて日比の本望とげまんぞくに（十三オ）そんじまする去ながら此女は毛ぶかい女にて思ふやうにはやわざがなりませいでやう〳〵に七つほど埒あけました。そのとき新六よこ手をうちきもをけしさて〳〵。初より心がゝりに思ひしがその毛ぶかい女はそれがしが女房どもじや。おのれま男したゞはおかぬそと云久米助は取ものもとりあへず。にげてゆくあとをしとふて追かけゆけども行がたしらずなりにけり

好色つやおとこ巻之二終（十三ウ）

〔解題〕

一　書名について

書名にある「つや男」は「艶男」の意であるが、『日本国語大辞典第二版』（小学館、平12～14）には浮世草子『五ケの津余情男』（作者・都の花風、元禄十五年三月刊）の次の用例（傍線部分）が初出として挙げられている。当該箇所を含む前後を補って次に記す。(1)

只いはふなきは女郎の酒、少しのみなして、うつくしひ顔に時ならぬ紅葉のくれなひ、ばつとしたる取なり、下戸ならぬ太鼓もちの住家は島原にこそありけれと、彼吉田のすい法師のいひをきけむも、げにとおもはれ侍べりぬ。彼里の風流今いふもくだ也。一代二代のぞめき男にくはしければ、其沙汰は止ぬ。……都の春、花の時こそこよなふ、外の国には又もあらじと、東風吹や心うきたつ東山……いかなるとつてをきの奥様、歯黒つけぬ娘子にても、……葉染の後帯水木辰之助がゝりにむすびさげ、おもひ〳〵の色くらべ、……物さへあらば今日の女のぶん、ひとりものこらず我ものにしたひと、大わらひして清水の方へ歩ば、……石段一

つ〳〵よふで行に、又色にそむる心の家居もつき〴〵しき軒のつま、彼夕がほのそのむかし、品在原のつや男、月やあらぬとかこちつゝ、恋にうき身をさすらひし、五条あたりもこれなるべし。

（巻一、二「九重のはな見」）

右の引用箇所は島原の遊女評判や花見時の東山辺りの風俗・風景が描写されているが、『日本国語大辞典　第二版』に挙げられた傍線部は、五条辺りの風景から『源氏物語』の「夕顔」が想起され、さらに『伊勢物語』の「東の五条」（第四段）、そして在原業平へと連想が続く箇所にあたる。「つや男」とは『伊勢物語』の主人公と目されてきた業平のような色好みの男のことであることが了解されるが、『好色つや男』では主人公久米助の別名として使用される。久米助の初登場は次のように記される。

その時久米助は京よりはる〴〵下りて、よき借屋もあらばと思ふ。幸後家の表借屋をかり、一日〳〵と暮しける。後家は此つや男を見そめて、

（「男の手柄に済借屋賃」）

さらに久米助は自身の好色談を新六に語り、次のように讃嘆される。

いつも夜半まで碁・双六打て四方山のはなし。其あいはよしはらぐるい、京のしまばら、大坂新町ばなし。口話してほむらをもやす柴屋まち、扨又道中の出女房、問屋はすはのつらのあついしかた、よき客にはずいぶんまわり、とれぬ客には何事もをとがいでおしへて臭をふり、面白事もなし。世の中にうまいものといふはま男、又後家のねはだ、さては人のむすめ、人めをしのぶこしもと、立ながらのやりくり、はやわざするも面白ものなり。その外のことは存じませぬ。先おもひ入を御咄中とかたれば、新六も狂にいり、さて〳〵こなたは業平にまさりたる恋しりといふて、ほめられける。

（「取違たる蚊屋の内」）

久米助が京からの下り（東下り）人として示されることもさることながら、二重傍線部に見られるように「つや男」久米助の属性として恋知りの業平という性質が付与されていることに注目したい。もちろん色好みの業平という性格は伝統的に定着しており、目新しさはない。しかし、そうした属性を含意する「つや男」の用例が、初出とされる『五ケの津余情男』とともに、本書にも確認できることは記憶されてよかろう。

先に見た『五ケの津余情男』では「葉染の後帯水木辰之助が、りにむすびさげ」といった、当時流行の「水木結び」などの女性風俗が活写されるが、そのことから「つや男」も当時のある種の流行語であった可能性もある。『五ケの津余情男』と本書との共通性もそうした時代的背景に求めることもできそうである。

二　作者について

作者については未詳とせざるを得ないが、先に挙げた『五ケの津余情男』の波線部において、『好色一代男』（天和二年十月刊）『好色二代男（諸艶大鑑）』（貞享元年四月刊）に言及されていることに留意したい。本書には次のような記述が見られるからであるが、傍線部は『好色一代男』の女護島への島渡りを意識したものであり、久米助に一代男「世之介」のイメージが重ねられている。

つや男は茶屋へはしり行、ていしゆに内証合点させて、おくざしきの一かまへある所へ女中がたをいれて、さて盃いだし、よきほどにさけすゝめて、てうしをとりて、障子さら〳〵とたてまはせば、女のしまへわたりたるこゝちに思ひける。とかくこのうへは闘どりして、とりがちたる女中様を一ばんにはじめませうといへば、

（「常たしなむ薬の付加減」）

こうしてみると、本書と『五ケの津余情男』には発想や用語における共通性が見られ、両書に同一作者を想定することもあながち否定はできまい。[2] ただし、好色本において業平や西鶴作品に言及することは珍しいことではなく、ある意味ジャンルとしての属性とも言えよう。同一作者の問題は今後の検討課題とせざるを得ないが、両書の共通性には注意すべきであろう。

なお、本書における西鶴作品からの影響について付言しておくと、誤って新六の内儀と不義を犯す「取違たる蚊屋の内」には、『好色五人女』（貞享三年二月刊）巻三の「おさん」からのヒントが窺えそうである。おさんの破滅的な話を滑稽に転じたところに作者の工夫があったとすべきであろう。

三　刊行年代について

現存する本書は巻二のみの零本一冊であり、刊記は不明であるが、先の「備考」に記した野間氏は元禄年間の刊行と推測されている。氏による考証はなされていないが、本書の刊行年代については推測すべきいくつかの手掛かりが確認できる。

先に本書と『五ケの津余情男』との共通性について触れてきたが、両書においては本書の先行性が窺えるように思われる。

『五ケの津余情男』の序文には「帥奈人之五ケ津之咄於余情男尓錣美」とあり、「余情男」は「帥（粋）な人」の意であることがわかるが、遊女評判記や西鶴作品に頻出する「帥（水・粋など）」を「余情」と言い換え、「余情男」を「好色男」の意として示そうとしたところに、作者の新味があったと言えようが、そこには先に確認した「つや男」の属性をも含意する用語としての「余情男」が新たに提示されていると見てよい。換言すれば、「つや男」との差別化において「余情男」なる造語がなされた可能性が窺え、商品としての好色本『好色つや男』の先行性が推測できそうである。以下、元禄期の江戸版・上方（京都）版好色本との比較を通じて、少しく両書の前後関係や刊行年代について考えてみたい。

元禄八年正月、桃林堂蝶磨を作者とする『好色連理松』『好色赤烏帽子』『好色酒呑童子』が相次いで出版され、江戸版好色本が量産されるようになるが、蝶磨の『好色桐の小枕』（元禄十六年正月刊）巻四「第八　名月の振鬮」には先掲の本書「常たしなむ薬の付加減」と共通する趣向が窺える。「名月の振鬮」の簡単な梗概と本文の一部を次に挙げる。[3]

〔梗概〕

さる方の奥女中十二人は気煩いの療治と称して、お局とともに十五歳の「やさ都」を伴い八月十四日の屋形船の催しに出かけるが、雨のために金龍山の船宿で朝まで飲み明かすことになる。酔い機嫌となった奥女中十二人は鬮取りで順番を競い、やさ都との情交に耽る。

いづれの奥かたにや有けん、めしつかはれし女中、その数十二人、同じやうに気わづらいして、次第〳〵におとろへ、……時しも八月十四日、待宵の月見ながら、屋かたぶねのもよほしに十二人の女中もいつ〳〵よりこゝろよく、……御出入のやさ都をめしつれ、たそがれ時よりふねを出して大はしの上へこぎのぼれば、……彼女中の屋かたぶねは金龍山のきしにかけて、山した屋が座しきを雨やどり。いつその事に夜あけかぎり、此座しきで呑あかせと、局の過しさゝきげんに十二人の女中もほぎ〳〵する酔のまぎれ、あはれさてかふした所へすそばりな男二三人ほしや。此とし月の気ばらししやうものをと、あばれごといふ程男ゆかしく、十五になりしやさいちをとらへて……とかくこれをたゞはおかれまじ。くじとりにして順まはりにものさせてあそぶべし。うらみこいのないやうにまかなふてくれよと云へば、……女中たちはいさみすゝみて、おつぼねのふりくじ出すを思ひ〳〵にとりて見れば、まづ一番はとしまのおのゑ、二番にこしもとのさくら、三番は小笹、……

気詰りな奥女中が気晴らしのために浅草方面（浅草寺・金龍山）に出向き、宿の座敷で鬮取りの情交を争うという趣向が一致していることは明らかであろう。もちろんこうした一致が偶然である可能性、または両書に共通する何かしらの典拠を想定することは不可能ではないが、そうした確かな典拠を今のところ見出すには至っていない。したがって、そうした可能性を留保した上で両書に影響関係を見出すとするなら、本書の先行性が窺えるのではなかろうか。というのも、好色本において、後続作品は先行作品をより煽情的・誇張的に摂取することが通例のように思われるからである。三人の奥女中を十二人に誇張することはあっても、十二人を三人に縮小することは逆方向であり、また挿絵も『好色桐の小枕』は完全に春画化されている。地域性や版元・作者の個性は考慮すべきことではあるが、本書に比べて『好色桐の小枕』の方がより過激であることは疑えない。

蝶磨がデビューする元禄八年正月には、京都版『好色とし男』[4]が半紙本（半丁十行）で刊行され、本書との書名や書式の類似性において

注目されるが、『好色一代男』『好色二代男』以降、貞享・元禄期において『好色～男』と銘打つ作品には次のようなものがある。[5]

貞享三年正月

・『好色三代男』　大本五巻五冊　京都版（京都西村市郎右衛門・坂上勝兵衛、江戸西村半兵衛）

元禄二年正月

・『好色浮世男』　半紙本四巻（四冊）　江戸版（無版元、書誌的特徴による）

元禄七年八月

・『好色難波男』　半紙本五巻五冊　江戸版（江戸木地屋文右衛門）

元禄八年正月

・『好色とし男』　半紙本五巻五冊　京都版（『増益書籍目録』によれば、京都升屋五郎右衛門）

・『好色十二人おとこ』　半紙本六巻六冊　京都版（京都井筒屋庄三郎）

元禄九年正月

・『好色出来心幷うかれ男』　半紙本五巻（五冊）　京都版（京都一文字屋伊澤一郎左衛門）

参考

元禄十五年三月

・『五ケの津余情男』　大本五巻五冊　京都版（京都中川茂兵衛）

元禄十六年正月

・『好色桐の小枕』　半紙本五巻五冊　江戸版（江戸燕雀堂）

こうして見ると、元禄八、九年頃に半紙本仕立ての京都版（いずれも半丁十行）がやや集中的に刊行されるとともに、それ以降は確認できなくなることがわかる。本書が上方版（京都版）であることが予想されることを考え合わせるとき、元禄期後半あたりが本書の刊行年代の目安となりそうである。『五ケの津余情男』と『好色桐の小枕』の刊行年が元禄十五、六年と近接することから、両書が直近のトピック作品として本書を利用した可能性もあろうが、いずれにせよ、刊行年代は元禄期を大きく下ることはなさそうである。本書の刊行は元禄期、せいぜい宝永前期頃を下限とすべきように思われる。

おわりに

西鶴は元禄六年八月十日に没する。上方・江戸の作者・書肆はポスト西鶴をめぐって試行錯誤を繰り返すことになるが、「好色一（二）代男」に代わる「好色～男」の創造もその一つと言えよう。本書は零本一冊ながら、そうした好色本の出版環境や多様な試みを窺わせるものとして貴重な作品となろう。

注

（1）早稲田大学図書館蔵本。大本五巻五冊。刊記「元禄十五壬午歳／三月吉祥日／姉小路通堀川東入町／書林　中川茂兵衛板行」。なお、引用に際しては私に清濁・句読点を施し、ルビは適宜省略した。以下の原本からの引用も同じ。

（2）『五ケの津余情男』の作者「都の花風」に浮世草子作者「都の錦」を擬する見方もあるが（中山尚夫氏「『五ケの津余情男』とその作者について」『文学論藻』51、昭51・12）、なお慎重に検討すべきであり、今は採らない。

（3）『京都大学蔵　穎原文庫選集　第一巻』（臨川書店、平28）による。刊記「元禄十六癸未歳孟春吉旦／板本　燕雀堂」。

（4）刊記「元禄八乙亥歳正月吉祥日／書林開板」。『増益書籍目録』（元禄九年正月刊）には「五／舛や五　同（好色）としおとこ弐匁」と記されており、京都升屋川勝五郎右衛門の刊行と見なされる。

（5）野間光辰氏『初期浮世草子年表』（青裳堂書店、昭59）を参照し、未記載の作品等を適宜補った。

（二〇二一年九月三十日受理）

（ふじわら　ひでき　文学部日本・中国文学科教授）

本研究はＪＳＰＳ科研費２１Ｋ００２６７の助成を受けたものです。